

プログラム・ノート——ドイツ音楽に「構築」を聴く

音楽を形づくる細胞としての、短いメロディ（動機）が、反復されたり、変形・変奏されたり、短く圧縮された形で積みかけられたりするとき、われわれは、あたかも細胞分裂のように、音楽がリアルタイムで有機的に生成していくのを体感できる。とりわけドイツの作曲家たちは、ロジカルな思考で、このような「音の構築法」に拘泥してきた。

今や作曲家たちの尊敬を一身に集めている J. S. バッハ (1685-1750) も、生前は一介のライプツィヒの教会音楽家に過ぎなかった。彼は頑固一徹の職人で、キャッチーなホモフォニー音楽（メロディーと伴奏による）の流行に背を向けて、フーガなどの複雑な対位法音楽（複数のメロディーを重ね合わせる）を追求し続けたが、教育用にシンプルに書かれた「インヴェンションとシンフォニア」などを観察すると、いかに彼が動機をパズル的に組み立ててゆく才に長けていたかが分かる。6つのパルティータ (1731) は、《クラヴィーア練習曲第1巻》作品1と題してバッハが最初に自費出版した曲集で、アルマンド、サラバンドなどの種々の宮廷舞曲を束ねた組曲集として、《イギリス組曲》《フランス組曲》に続く集大成的な作品である。第6番 ホ短調は、劇的な緊張感の際立つ大作で、舞曲のスタイルをとりながらも、厳格な対位法的構築（特にトッカータとジグにおけるフーガ）が壮麗な「音の構造美」を湛える。トッカータ、アルマンド、コレンテ、エール、サラバンド、テンポ・ディ・ガヴォット、ジグから成り、トッカータ冒頭の堂々たるアルペジオに続く「G-F#」の動機が後続の各舞曲でも印象的に用いられ、作品に統一性をもたらしている。

ハイドン (1732-1809) は、大貴族エステルハージ家のお抱え楽長として、おびただしい数の器楽曲（交響曲、弦楽四重奏、ピアノソナタ）を書いた。これらはエステルハージ侯爵の注文によるもので、主に「機会音楽」(BGM)として来賓の前で演奏され、目上の人たちのお耳を楽しませた。C.P.E. バッハが開拓しハイドンが定着させた「ソナタ形式」は、2つの主題が異なる調性で提示され（提示部）、提示された素材がさまざまな調性をさまよい高揚し（展開部）、2つの主題が元の同じ調性で再現される（再現部）という音の構築様式で、プロポーションが良く、機会音楽の量産に適していた。この鋳型のなかでも、ハイドンは、しつこいほどの反復や、予測を裏切る不規則なフレーズなど、ユーモアやサプライズのセンスに長け、音楽を面白いものになっている。ソナタ ホ短調 Hob. XVI:34 (1781-82頃) は、ソナタ形式による第1楽章プレスト（ホ短調）と第2楽章アダージョ（ト長調）、ロンド形式（主題とエピソードが交互に現れる）による第3楽章ヴィヴァーチェ・モルト（ホ短調）から成り、短調作品ながら総じて軽快でリリカルな曲想が光る。

ベートーヴェン (1770-1827) はハイドンの弟子だが、師とは異なりフリーランスの作曲家だ。パトロン向けの他人行儀の殻は脱ぎ捨て、ロック的精神でじかに聴衆の心を揺さぶ

る。フランス革命の時代を生き、ナポレオンに共鳴して英雄交響曲を書いた。32 のピアノソナタはピアノの新約聖書と言われるが、後期に來ると、さまざまな実験的試みで従来のソナタの枠組みを打破している。ソナタ第 31 番 変イ長調 Op.110 (1821 年) は、高貴な抒情性と敬虔さを湛えた傑作。短いソナタ形式の第 1 楽章 (変イ長調) は再現部で遠隔調 (ホ長調) に飛ぶのがユニーク。第 2 楽章 (へ短調) は、2 つの流行歌「うちの猫には子猫がいた」「僕は自堕落、君も自堕落」の旋律が引用され、コミカルなスケルツォの性格。第 3 楽章 (変イ短調/変イ長調) は、Klagender Gesang (嘆きの歌) とフーガ。バッハの「ヨハネ受難曲」の旋律の引用 (イエスが十字架で *Es ist vollbracht* [すべて成し遂げられた]) と語り息をひきとる場面のアルトアリア) から高らかなフーガへ至る構成は、イエスの受難と復活を暗示し、聴き手を深い感動に誘うが、奇しくもミサ・ソレムニス Op.123 と同時期に書かれたことで、おのずと宗教的性格が反映されたと言えるだろう。4 度上行のフーガ主題は、第 1 楽章の冒頭主題から派生したもので、第 2 楽章と第 3 楽章も 6 度下降音階の動機で関連付けられ、ソナタ全体に有機的な統一性がもたらされている。

このような統一構築への志向は、ロマン派時代に多く書かれた小曲集形式にも引き継がれた。シューマン (1810-56) は、きわめて私的な想いを作品に投影させた人で、下降音階の動機を愛するクララの象徴と見なし、作品のあちこちで用いた。「子どもの情景」では、さまざまな表情をもつ小曲が、クララ音型によって、変奏曲にも通じるような不思議な統一性を見せている。そして、驚くべきことに、シューマン夫妻と親しく交わり、同じくクララを愛していたブラームス (1833-97) も、シューマンの「クララ音型」を継承していた。晩年に、故シューマンの楽譜出版をめぐる諍いから、クララと仲直りする契機にしようと書かれた 6 つの小品 Op. 118 (1893) にも、下降するクララ音型が頻出 (第 1・3・5 曲の主題、第 2 曲の中間部など) し、ブラームスの切々たる想いを乗せながら小曲集にソナタ的統一性を持たせている。間奏曲 イ短調、間奏曲 イ長調、バラード ト短調、間奏曲 へ短調、ロマンス へ長調、間奏曲 変ホ短調の 6 曲から成り、第 2 曲のあまりにも美しい dolce の旋律「G#-A-F#」(主題の反行形) は、第 6 曲のたゆたう主題への伏線となっている。「ヨハネス、最新の《ピアノ小品集》に免じて、私たちの友情をもとの鞆に収めましょう」。1895 年の 10 月、ブラームスがクララを訪問したとき、クララは Op.118 の第 5 曲と第 6 曲を弾いたが、それが 2 人の最後の面会となった。翌年クララが天に旅立つと、ブラームスも後を追うように、1 年後にその生涯を閉じる。

ドイツ音楽特有の「構築」の美を描き出すには、音楽に対するストイックな姿勢と丹念な彫琢が欠かせない。1995 年生まれの藤原直也は、ザルツブルクにて名教授クリストフ・リースケに 10 年間師事した新鋭。美しい心を持った青年で、ひたむきに音楽に奉仕する真摯なピアノを奏でる。ドイツ音楽の神髄とも言うべき 4 作品の構築過程を、藤原の手で追体験できる皆さんは幸運である。

内藤 晃 (ピアニスト、指揮者)